

研究課題	楽習につながる一人一台端末を有効活用できる児童の育成
副題	～オールインワン文房具、情報収集・発信のツールとしての一人一台端末の活用典型事例の創出～
キーワード	ICT 自由進度学習
学校/団体名	札幌市立豊平小学校
所在地	〒062-0905 北海道札幌市豊平区豊平五条7丁目1-2
ホームページ	<a href="https://www16.sapporo-c.ed.jp/toyohira-e/">https://www16.sapporo-c.ed.jp/toyohira-e/</a>

## 1. 研究の背景

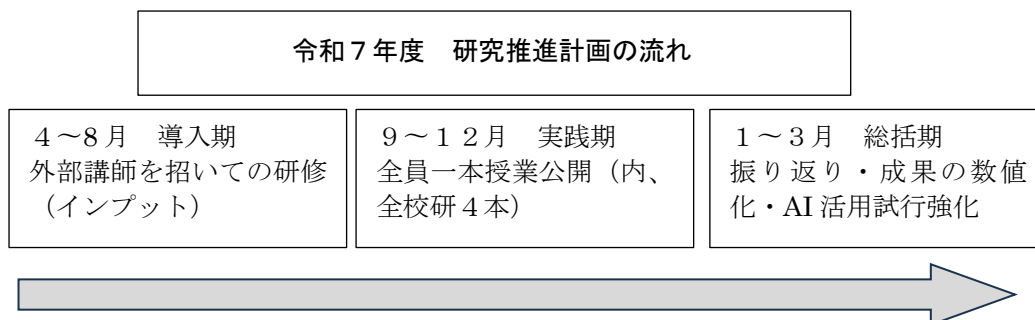
### 現状と課題

本校では「自ら考え進んで表現する子」の育成を掲げ、ICT を文房具として活用する授業改善に取り組んできた。しかし、教員間での端末活用経験には大きな差があり、学校情報化レベル（教科指導における ICT 活用）は 0.6 という実態があった。特に、個別最適な学びを具現化する「自由進度学習」への挑戦において、端末を単なる提示用ツールに留めず、いかに児童の「自己調整能力」を高めるためのツールへと昇華させるかが本校の喫緊の課題であった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、1 人 1 台端末を活用した「自由進度学習」の指導法確立と、基礎・基本の定着を保障する「スタンダードモデル」の確立を両輪とし、真の「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業を創出することにある。端末を「オールインワン文房具」と定義し、情報収集から思考・判断、そして表現・発信までをシームレスに行う活用典型事例の創出を目指した。

## 3. 研究の経過



## (1) 導入期 専門家との連携による理論構築

安井政樹准教授（札幌国際大学）を指導助言者に迎え、理論と実践の往還を図った。

- **4-8月（導入期）**：自由進度学習のブレスト研修を通じ、「自己調整学習」のイメージ共有を実施。佐藤和紀教授、姫野完治教授のセミナー助言を受け、拙速な導入を避け、教員の不安に寄り添う段階的研修を設計した。



年間を通じてアドバイザーとして本研修に伴走してくださった札幌国際大学の安井准教授（中央）による講話風景（7月18日）



自由進度学習など先進的な教育実践事例を発信している札幌市立新川中央小学校の難波教諭(テレビモニター)によるオンライン講話風景（7月24日） 右は本校研修部長小森教諭

## (2) 実践期 全校研修「1人1本公開授業」の展開

全教員がA～Dの4ブロックに分かれ、各ブロック1本研究授業を公開し合う体制を敷いた。

- **9月（小笠原学級）**：単線型から複線型授業への移行
- **11月（玉井・櫻井学級）**：社会におけるICTを活用した「学びの可視化」
- **12月（中戸川学級）**：クラスの温もりを重視した「愛のあるICT活用」



助成金より購入した32インチモニターを活用した授業風景（共同編集したスライドを使ってプレゼンする子どもたち）



6年生社会「明治の新しい国づくり」の全校研授業風景

(3) 総括期 自由進度学習実践総括・AI活用試行思考

・1-3月 研究成果のデータ分析検証、AI活用による校務・授業討議の効率化、研究成果報告書の作成と次年度の構想策定

以下に、今年度の主な研修日程をまとめる。

日付	内容	形式	ご依頼内容	備考
7/18 (金)	月例① 自由進度学習のプレスト研修	対面	ファシリ・対話支援。「自由進度学習」のイメージ共有→「自己調整学習」への接続	
8/22 (金)	全校研①の事前打合せ	オンライン	授業者+講師による構想共有・助言	
9/18 (木)	月例② 全校研①(小笠原学級)+ミニ研修	対面	全校研授業の助言+講話	
9/30 (火)	全校研②の事前打合せ	オンライン	授業者+講師による流れの確認・助言	● 16:00 までなら実施可能(空港から)
11/12 (水)	月例③ 全校研②(玉井学級・理社)+ミニ研修	対面	全校研授業の助言+講話	
11/14 (金)	月例④ 全校研②(櫻井学級)+全校研③	対面	全校研授業の助言+講話	
12/18 (木)	月例⑤ 全校研④(中戸川学級)+ミニ研修	対面	全校研授業の助言+講話	✕ 不可(安井先生、講義のため不在。動画を視聴いただき後日助言いただく)
2/6 (金)	月例⑥ 「AIによる業務改善」	対面	講話+実践形式	
3/13 (金)	月例⑦ 成果発表・総括	対面	次年度プレストのファシリテート、講評、総括コメント	

4. 代表的な実践

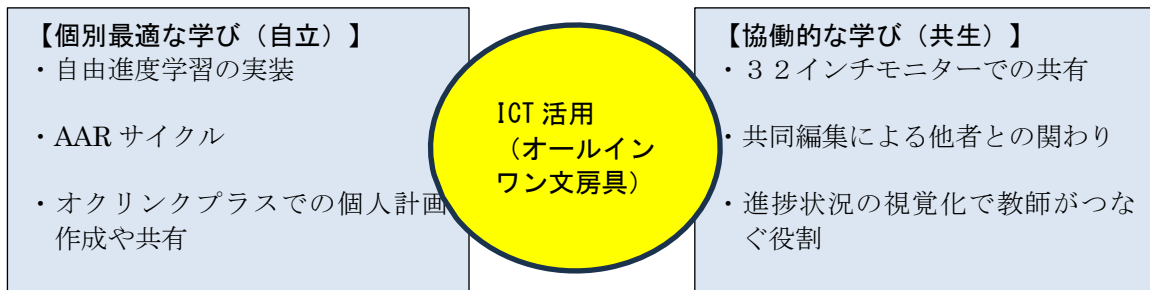
(1) 複線型授業への転換と「自己選択」の保障

安井准教授からもご講話いただいた「自己調整学習」の視点に基付き、単元全体を見通した「学習計画表」をオクリンクプラス等でデジタル共有した。児童は自らの進度や理解度に応じ、「動画教材での個別学習」「友だちとの対話による協働学習」「教師によるスモールステップの指導」を自ら選択して学びを進めた。ここでは、教師のタブレットや32インチモニターをフル活用し、必要な情報をいつでも児童が手元で、あるいは大画面で確認できる環境を整えた。

(2) AAR サイクルによる「評価力」の育成

「見通し (Aim)」「行動 (Action)」「振り返り (Reflection)」の AAR サイクルを重視し

た。ICT の強みである「記録の蓄積」を活かし、前時の振り返りを踏まえて本時のめあてを立てる「学びの連動性」を強化した。自分の思考プロセスがログとして残ることで、児童自身の「自分の学びを客観的に見取る力（評価力）」が向上した。



## 5. 研究の成果

### (1) 児童の変容（アンケート結果に基づく客観的証明）

質問項目	4月	3月	伸び率
1. 自分でめあてをもって取り組めた	87%	91%	+4%
2. 学習の進め方や計画を、自分で考えて選ぶことができましたか？	47%	86%	+39%
3. 端末を自分の文房具として使えている	64%	92%	+28%

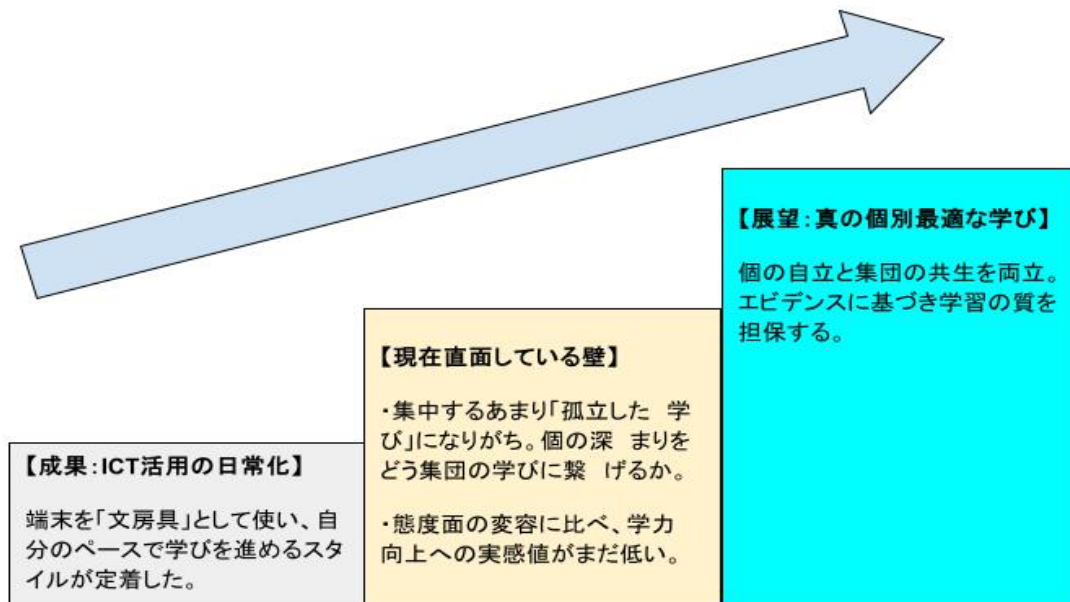
- 「自分でめあてをもって取り組めた」とする肯定的回答が、事後調査で91%（当初目標90%以上）に到達。
- 自由進度学習におけるICT活用が、単なる作業の効率化ではなく、学習に対する「自己効力感」と「楽しさ」の向上に寄与したことが証明された。

### (2) 教職員の組織的変容

- 全員授業公開を通じ、「ICTは特別なものではなく、文房具である」という共通認識が定着。
- 学校情報化レベルは、教科指導・情報教育ともに目標としたレベル1.6（当初比+1.0）を達成し、若手・ベテランを問わないスタンダードモデルが確立された。

## 5. 実践推進上のつまずきと悩み（考察）

本研究を通じ、ICT 活用のプラス面が確認された一方で、以下の深刻な課題が浮き彫りとなった。



1. 「個別最適な学び」における「孤立」の問題： 端末への集中度が高まる一方で、佐藤（2024）が指摘するように、個の深まりをいかに集団の対話へと繋げるかが課題となった。「一人で学ぶこと」と「共に学ぶこと」のバランスを教師がいかに調整するかが、複線型授業の成否を分ける。
2. 学力定着への実感値の不足： 学習意欲の向上に比べ、「基礎学力が向上した」と確信を持てる教員はまだ少ない。姫野（2022）が警鐘を鳴らす「放任」を避け、ICTを活用していかに精緻な評価と指導の個別化を行うか、次年度への大きな宿題となった。

## 6. 今後の課題・展望

本年度は「自由進度学習」の素地作りを終えた。今後は、本研究で得た「学びの足あと」の分析に AI 等を活用し、教師の伴走（介入）の質をさらに高める。文部科学省（2021）の目指す姿を理想に掲げ、本校独自の「楽習」モデルを、札幌市、そして全国へ発信できる典型事例へと昇華させていく。

## 7. おわりに

本研究は、パナソニック教育財団の多大なるご助言と助成を賜り、本校の授業改善における大きな転換点となった。当初、ICT 活用への不安を抱えていた教員集団が、安井政樹先生や諸先生方の知見に触れ、自らの授業を「複線型」へとアップデートしようと果敢に挑戦した過程そのものが、最大の成果である。自由進度学習における「個の自立」と「集団の共生」の両立や、ICT 活用による確かな学力向上の実感など、残された課題は少なくない。しかし、私たちは一人一台端末を「愛のあるツール」として捉え直し、子どもたちが自らの足で学びを進める「楽習」の姿を追い求め続ける。本研究で得た教訓を糧に、笑顔あふれる学校の創造に向け、今後も全校一丸となって研究を深化させていく決意である。

## 8. 参考文献

- ・佐藤 和紀 (2024) 「(コラムのタイトル: GIGA 第2ステージの授業づくり)」『日本教育新聞』2024年7月22日付、8面
- ・姫野 完治 (2022) 『ICTを活用したこれからの学び:次世代を担う教師のためのICT入門』
- ・文部科学省 (2021) 『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して(答申)』